

絶倫すぎるんです、公爵様っ！

不吉令嬢だったのに、聖女として溺愛されています

プロローグ

——ベッドの軋^きむ音が、静かな寝室に規則的に響く。

「ん……っあ、ああ……っ、レオンっ」

セレナの声が、か細く震えながら喉奥から漏れる。ゆっくりと、深く出入りするそれは、奥をえぐるたびに、湿った音を響かせる。

「っ……セレナの中、気持ちいい……」

レオンの低く濡れた声が、耳元に熱を吹きかける。

「やつ、そんな、こと耳元で、言わないでっ、あっ、んう……っ」

ゆっくりと角度を変え、わざと敏感なところを何度も擦るように突き上げてくる。セレナはびくんと強く腰を跳ねさせた。

「レオン……っ、もう、やだ……っ」

濡れた音が生々しさを増していく。蜜が太ももを伝ってシーツに落ちていくのが、自分でもわかる。レオンの囁^{ささや}きが熱を孕^{はら}んで、耳元に落ちる。

「あっ、ん、あっ……っ」

舌を甘く吸われながら、腰の動きが深くなっていく。セレナはびりびりと痺れるような快感に突き落とされた。声が漏れ、意識が遠のきそうになりながらレオンの首に腕を回し、ぎゅっと抱きしめる。

「セレナ。もつと名前を呼んで……」

うるんだ瞳がまっすぐレオンの瞳を捕らえる。

「んっ、レオン、すき……気持ちいい」

その言葉を皮切りに激しくなった腰の動きと同時に、くちゅくちゅと水音が一層響き渡る。ベッドが軋む音までが快感を煽り、ふたりの理性はもう、とつくに蕩けていた。

「ああっ、ん、いくつ、もう、だめっ」

——深く、深く、結ばれながら、セレナは奥までレオンの熱で満たされ、ゆっくりと快樂の夜に溺れていった。

セレナが、公爵様の『ある秘密』を知るのは、もう少しだけ夜を重ねた後のこと。溶けるような夜の中で、ふたりの運命は静かに動き出していた。

第一章 不吉な令嬢と、呪われた公爵

黒髪に黒い瞳。それは、カルミア帝国では『禍を招く不吉な存在』^{わざわい}と言い伝えられる。そして、セレナ・アルシェリアは生まれたときから、その『証』を抱えていた。

伯爵家の次女ながら、疎まれ、名も呼ばれず、教育も受けることなく育った。存在そのものがなかったかのように、十八年間伯爵家の離れに閉じ込められている。

「おはよう、ミラ」

セレナが使用人のひとりに声をかけると、彼女は顔をこわばらせ、無言で通り過ぎた。使用人からも見下され、いないものとして扱われている。必要最低限の物だけ支給され、食事は使用人の残り物が回ってきているようだ。

「私は、何のために生きているんだろう。どうして生まれて来たんだろう」

幾度となく繰り返してきた言葉を呟き、深いため息をついた。

ふと鏡に目をやる。血の気がなく、真っ白で、まるで人形のように生気のない顔。黒髪は肩を越えて波打ち、影を落とす。病弱なものも相まって、体つきも貧相。何着かある素朴なドレスでさえ似合わない。真っ黒な瞳と目が合い、鏡の中から視線を逸らした。

「……庭園にでも行こうかな」

この日常の中で、セレナにとって唯一の楽しみだった。こっそり取っておいた水と食べ物を持ち、庭園へ足を運んだ。廊下の角を曲がったとき、セレナはふと立ち止まる。控えの間の戸が、わずかに開いている。中では使用人たちが給仕の支度をしながら、声を潜めて話していた。

「また食事、口にしなければいいわよ」

「えっ、また？ 本当に幽霊みたい。あの髪と目、見てるだけで寒気がするのよね」

いつものことなのだから聞かなければいいのに、足が止まってしまった。カビが生えている所を避けただけなのにこの言われようだ。

「でもまあ、そう長くはないんでしょう？」

「ええ、奥様も仰ってたわ。『黒髪黒目の忌み子は短命だ』って」

その声が届いた瞬間、耳の奥がじんと痛み、気が付いたら走りだしていた。

『黒髪・黒い目で生まれた者は短命』

何度か耳にしたことがある言葉。常に体の不調と闘ってきたが、ここ最近体調を崩す日が増え、体のあちこちが痛む。

「やっぱり短命だつて話……本当なのかもしれない」

嫌な予感が頭を駆け巡る中、振り切るように足を速める。

「あの子、来てるかな」

——離れの裏手にある、手入れの行き届いていない小さな庭園。この場所だけは、誰にも干渉さ

れない。セレナにとって、唯一息ができる空間だった。背の高い茂みの間をすり抜けると、いつもの場所にあの子がいた。

「今日も、来てくれたのね」

黒い毛の瘦せた猫。数日前、庭の片隅で弱々しく丸まっている所を見つけ、それからこっそり食べ物を持ち込むようになった。右足を引きずって、毛並みもぼろぼろ。誰かに見つければ処分されるだけだと、ひっそりと足を運んでいる。

「ごめんね。こんなことしかしてあげられなくて」

警戒していて今まで触れることもできなかったが、何度か顔を合わせたおかげか今日は少し気が緩んでいるようだった。

「君はなんだか、私と似ているね」

ボロボロになった姿が自分と重なり、頭を撫でようとゆっくり手をのばし、毛並みに触れたそのときだった。じんわりと、指先がぬくもりに包まれる。右足の傷に触れたわけではないが、そこからふわりと淡い光が立ちのぼったように見えた。

「え？ 何今の……」

一瞬、幻かと思った。でも、猫は驚いたようにこちらを見て、ゆっくりと体を起こした。——もう、右足を引きずっていなかった。

「な、何？ 治ってる……の？」

思考が追いつかず、小刻みに震える自分の手元を見つめた。

（偶然……だよな？）

それでも、手の中に不思議な感覚が残っているのは確かだった。

ある日の朝。セレナは離れではなく、伯爵家の本邸に足を運んでいた。朝食に招かれたのは、いったい何年ぶりだろうか。セレナは震える指先を膝の上でぎゅっと握りしめ、静かに椅子に腰を下ろした。この家の食卓に座った記憶は、幼い頃にほんの数回。

その時のセレナは、隣に座っていた母のドレスにスープを飛ばしてしまった。まるでセレナが些細な失敗をすることを待っていたかのように、母は口角を上げた。

『不吉な子是不吉なことしか起こさないのね』

それ以来、食事の場に足を踏み入れることを許されていない。

『あの子の気配は、食事の味まで悪くするわ』

『黒い目で睨まれると、背中がぞわつとするのよね。本当に気持ち悪い』

食事の席を立つ去り際、聞こえるように嫌味を吐き捨て、母と姉がクスクスと笑う声が今も耳にこびりついている。父は何も言わない。ただ目を背けるだけ。使用人がする噂話を何度となく聞いてきたが、どうやら父はセレナの存在自体を世間に隠そうとしているらしい。パーティーはもちろん小さなお茶会にも一度も参加したことはなかった。セレナは、自分がこの家の汚点なのだと、幼い頃から理解していた。

——そして今、セレナが席に着いても、父も姉も、そして母も視線を寄越さない。それでも、こ

の場に呼ばれたことが嬉しかった。まだ家族でいられるんだと、何か変わるのかもしれないと、少しだけ期待してしまった。

張り詰めた空気を破ったのは、乾いた父の声だった。

「お前の嫁ぎ先が決まった。ようやくお前にも価値が与えられたな」

驚く間もなく矢継ぎ早に声が飛ぶ。

「公爵家だ。あの『呪われている』とかいう、ノクティス公爵からの求婚状だ」

「しかも、どんな条件でも飲むと書いてあったわ。呪われた公爵と禍を招く不吉なあなた。お似合いないじゃない。陰気臭いあなたに求婚だなんて、よほど相手に困ってたのね」

母の声に、乾いた笑いが重なる。セレナの手元のスープが、かすかに揺れた。誰も、セレナを家族とは思っていない。愛してくれるかもだなんて、思い上がりだった。灯ったばかりの希望は、ろうそくの炎のように頼りなく、音もなく消えていった。

セレナは俯き、何もかも諦めたかのように声を振り絞った。

「……その、公爵家は私のことを知っているのですか？」

「ふんっ、さあな。だが、そんなことは関係ない。向こうの目的はわからないが、どんな目に遭っても帰ってこようなどと思うなよ」

父はグラスを口に運ぶと、ため息混じりに続けた。

「公爵家にはすぐに返事をする。急いで出立の準備をしろ。公爵領はそう遠くないし、早いほうがいいだろう」

あまりにも急な話に、様々なことが一瞬にして頭を駆け巡った。

（どうして私が。ノクティス公爵様と結婚なんて。会ったこともないし、公爵家からすれば私や伯爵家に利用価値があるとも思えないのに）

いくら考えた所で、拒否権なんてあるはずもない。

（一生隠れて生きるか、売られるようにして嫁ぐことになるとは思ってた。それに、幸せな結婚を夢見ていたわけでもない。従うしかないけど……）

「はい」と返事をしようと思ったが、セレナの胸の奥にぼつんと残ったものがあつた。あの子の、柔らかな毛の感触とぬくもり。その小さな命を、手放したくなかつた。

「あの……お願いが二つあります」

場の空気が一瞬、止まる。セレナは震える自分の手を握りしめながら声を絞り出す。

「離れの裏庭で、怪我をした猫を世話しています。連れていってもいいですか？」

「はっ、好きにきなさい。処分する手間が省けるわ。で、もう一つは？」

鼻で笑いながら面倒くさそうに母が問う。

「あの……婚約期間を設けずに、結婚式も挙げずに、静かに書面だけで公爵家に入ることはできませんか？」

求婚状が届いたあとは、婚約期間や婚約式という段階を踏むのが一般的だということは知ってる。けれど、使用人から向けられたあの視線を大勢に向けられる。それは、人前に出たことのないセレナにとって、到底耐えられることではなかつた。

（私のことを隠そうとするくらいだから、伯爵家としても式で私を表に出すことは避けたいだろう。……きつと公爵家もそう思うだろうから、難しいお願いではないはず）

そんなことを考えていた時だつた。

「わかつた。条件は何でも飲むと書かれているから、すぐに使いに返事を送ってもらう」

「……本当ですか？　ありがとうございます」

文句の一つも言われると思っていた分、父の快諾に驚く。

「あの、それでは私はお先に失礼します」

頭を下げ、席を立つ。すると扉を開ける前から、背後で声が飛び交っていた。

「ごねられても面倒だつたからな。あれが『うちの娘』だと知られずに済むなら、それに越したことはない。公爵は慰み者にでもするつもりだろうな」

「それより、支度金はたくさん頂きましょう。公爵家に嫁ぐなら、それなりの額でしょうね」

「ふう。これでやつと社交界で陰口を叩かれなくなるわ。せっかくお父様が隠そうとしてるのに、噂になつてるもの。これからは、恥をかかなくて済むわ」

口々に飛んでくるその声は、まるで刃物のように背中を切り裂いていく。それが、この家でセレナに与えられた最後の言葉だつた。血のつながりなど、最初から存在しなかつたのかもしれない。そう思えるほどに、心は静かに凍りついていった。

行き先がどんな場所でも、結婚相手が呪われた相手だろうと。こと同じようにいないものとして暮らすだけ。ただ諦め、言われた通りにするしかない術がないセレナは、静かに全てを受け入れ、

肅々と準備を進めた。

そして旅立ちの日は、あまりに早くやってきた。不吉な娘を一日でも早く屋敷から追い出したいようで、その準備は、ほんの数日のうちに整えられた。

荷物は少なかった。自室の隅にあった古い鞆かばん、必要最低限の衣類と本、そして——小さな体に、そつと毛布をかけた黒猫。

「大丈夫よ、寒くない？」

セレナは腕に抱かれる小さな猫に声をかけた。もともと微かに動き、ぬくもりを求めるように体を寄せてくる。屋敷の門前には馬車がすでに待機していたが、見送りの人影はひとつとしてない。もう期待はしていなかったけれど。

「……行こう、猫ちゃん」

馬車が進みだすと、視界の端には屋敷の門がゆつくりと遠ざかっていく様が映った。だが、セレナは振り返らなかった。あの家で過ごした十八年。名ばかりの家族、冷たい部屋、息を殺して過ごす日々。名を呼ばれることも、微笑みかけられることもなかった。

「どこへ行っても、同じ。いや、もっとひどい目に遭うかもしれないけれど。君がいてくれるなら、頑張れそうな気がする」

不安を紛らわすように猫に話しかける。もちろん返事はないが、寝顔を見ているだけで心が満たされていく。すべてを捨てて、新しい場所へ。どこへ行っても変わらないと思いつながら、あの屋

敷から出られたことで、少しだけ心は前を向いていた。

それから、どれ程経っただろうか。馬車が止まった瞬間、空気が変わったのを感じた。

「着いた、のかな」

猫がかすかに鳴いた。セレナはそれに頷き返し、扉の開く音に身をこわばらせた。

——ノクティス公爵家。当主が代々短命であることから『呪われている』と噂されている。

先代公爵も早くに亡くなり、現当主である公爵は若くして爵位を継いだ。だが『呪われている』とは言え、皇家に次ぐ権威のある家門であり、公爵が皇家の血を引いていることに変わりはない。その主が、自分のような不吉な娘に求婚した。到底腑に落ちないが、疑問も不安も全ては胸に押し込め、セレナは静かに馬車を降りた。

足を降ろした石畳は、伯爵家とは比べものにならないほど整っていた。高い塀の奥に広がる庭園。そして、整えられた道のその先に、誰かが立っていた。

（もしかして、あれが公爵様……？）

その姿を目にした瞬間、セレナは息をのんだ。月光のような輝きを纏った銀色の髪が風に揺れていた。真っ直ぐに伸びた睫毛まつげの奥に、透き通るような碧眼へきがん。すっと通った鼻筋と、綺麗に結ばれた口元。硬い表情だったが、不思議と怖いとは思わなかった。

（なんて綺麗な人。まるで、彫刻みたい）

シンブルな装いだだったが、ただ立っているだけで絵になるような、凛とした存在感。その背筋は

堂々としていて、でもどこか孤独を背負っているようにも見えた。そして、ふと自分の貧相な旅装束が恥ずかしくなり、目を逸らそうとした瞬間。彼と目が合い、ぴくりと肩が揺れる。色んな感情が渦巻く中、最初に感じたのは――

（今、なんでそんな、優しい表情を……）

無表情だったその目元に、柔らかな感情が灯ったような気がして、セレナの胸がふわりと熱くなる。

「セレナ・アルシエリア嬢、ですわね」

低く、静かな声。けれど、その声音は冷たくなかった。

「はい……あの、わ、私が」

戸惑いと恥ずかしさからだろうか。うまく言葉が出て来ない。そしてセレナの動揺を見かねたのか、彼は自ら名乗り、微かに頭を下げた。

「ようこそ。私が、レオン・ノクティスです」

丁寧すぎるほどの所作。それが逆に戸惑いを呼び、セレナは無意識に猫を抱き直した。

「……猫、好きですか？」

思いもよらない言葉が漏れた。

（あ、どうしよう。自己紹介もしていないのに、こんなことを）

慌てて口を閉ざし、ますます固まるセレナを他所に、レオンの目がわずかに細められた。

「嫌いではありませんよ。あなたの大切な友達なのですね」

その温かい言葉にセレナは驚いたように目を見開き、小さく頷いた。公爵のその柔らかい表情に、緊張していた体が一瞬にしてほぐれていく。

（もしかして、私を迎えに来てくれたの？）

家族でさえも見送りにこなかったのに。

「どうぞこちらへ。長旅でお疲れでしょう。部屋を用意させています」

彼の背に従い、セレナは屋敷の門をくぐった。一歩足を踏み入れると、柔らかな絨毯に足音が吸い込まれる。案内役を買って出たレオンの隣を、セレナは猫を抱きしめながら歩いた。

足を進めることに緊張がほぐれたセレナは、息を吸い込み、レオンの瞳を見上げた。

「あの。遅くなりましたが、セレナ・アルシエリアと申します。お世話になります。猫も連れて来ることをお許しいただき……ありがとうございます」

先程言えなかった言葉を絞り出すと、息を合わせたように猫がふにや、と一声鳴いた。セレナの腕の中で丸くなった小さな生き物もまた、つぶらな瞳でレオンを見上げていた。

「その猫は？」

「あ、庭で怪我をしていたので……お世話をしていて」

セレナはそう呟くと、猫の頭をゆつくりと撫でた。レオンは黙ってその仕草を見つめた。

「名前はなんなんですか？」

「まだありません。伯爵家では一緒に暮らせるか、わからなかったので」

すると、レオンの声が静かに低く響いた。

「名は、あなたが付けるといい。これからは、その子もあなたの家族ですよ」

初めて掛けられた優しい言葉。慣れない穏やかな声色にどうしていいかわからず、セレナの指先がそわそわと猫の首元を撫でる。

（公爵様……表情は少ないけど、敵意や悪意は感じない）

廊下を曲がり、装飾が施されたドアのある部屋の前でレオンは足を止めた。

「ここがあなたの部屋です。隣は私の部屋なので、何かあればすぐに知らせてください」

そう言つて扉を開けると、そこには日差しが柔らかく差し込む部屋が広がっていた。華美すぎず、けれど一つ一つにこだわりとぬくもりを感じさせる、そんな空間だった。

セレナの足が自然と部屋へと踏み入る。猫は腕の中から飛び出し、散策を始めた。どこに行こうとも、いないものとして扱われる。ひどい目にあうかもしれない、とも思っていた。それなのに、想像もしていなかった歓迎にどうにも心が追い付かない。

「あの、なぜ私にこんな……黒髪で黒い目で、気味が悪いでしょう」

その問いは、自ら予防線を張るように、息を詰めて発せられた。そんなセレナの様子を見てレオンは表情を曇らせ、しばし沈黙した後、言葉を選ぶように口を開いた。

「まずは、体を休めてください。伯爵領からそう遠くないとはいえ、長旅でお疲れでしょう。入浴の用意をさせています。落ち着いた頃に伺いますので、その時にお話ししましょう」

その言葉と共に、レオンが軽く手を掲げると、控えていた一人の侍女が部屋の隅から現れ、深々と礼をする。

「慣れないことも多いでしょうが、ゆつくりしてください。——では、また後で」

レオンが部屋から出ていくと、侍女がそつとセレナの傍に寄った。

「本日からお仕えいたします。リナと申します。よろしく願いたします」

丁寧な後ろでまとめられている栗色の長い髪の毛、温かみのある琥珀色の瞳。少し年上だろうか。きはきとした口調だが表情は柔らかく、その眼差しは今まで使用人から受けた視線とは全く違うことがすぐにわかった。

案内された広い浴室には既に湯気が立ちのぼっていた。広くて美しい、大理石の浴槽。見守られていることに戸惑いながらも、湯に浸かった。温かさが身体の芯にまで染み込んでいくようで、思わず、ふうつと息がもれた。

「今日はカモミールを湯に浮かべています。公爵閣下のご意向で、疲れを癒やすものと」
背後から控えめな声が響いた。

「お嬢様のご到着を聞いてすぐ、お部屋もお風呂も整えるよう何度も念を押されて……ふふ、なんと『温水循環の魔法石』まで貸してくださったんですよ。とても貴重なもので、普段は閣下がお使いになっているのです」

——魔法石。いくら世間に疎いセレナでも、貴重なものだということはずぐにわかった。
（そんな。何故公爵様は、私なんかにそこまでしてくれるの？）

湯から上がると、リナが柔らかな布で髪を優しく包み込むように拭ってくれる。

「ふふ。とても綺麗な髪ですね。神秘的です」

「え？ ……黒い髪なんて、見ていい気持ちにはならないでしょう」

ぽつりと漏らした言葉に、リナはふいと手を止め、セレナの横顔を見つめる。

「どこがですか？ とても優雅で、白いお肌に映えて美しいと思います」

きっぱりとそう告げられ、その思いもよらない言葉に固まってしまった。

「そんな。あの……リナさんは、私が怖くないんですか？」

沈黙がひとしきり流れた。けれど、リナは笑って首を横に振る。

「怖いどころか、こんなに優しいお嬢様に恐れるものなんて何一つありませんよ。どうか言葉を楽にして、リナとお呼びくださいね」

リナはくすくすと笑いながら、セレナの身支度を整え始めた。今度はドレスを丁寧に広げる。子供の頃、姉が綺麗なドレスを着る姿を見て、幼心に憧れていたことを少し思い出した。期待なんてとうの昔に捨てたはずだったのに、胸がドキドキと動き出す。

薄い青色で繊細な刺繍が施されている上質なドレス。セレナは息を詰めたまま、着飾られていく自分の姿を鏡越しに見つめていた。誰かに美しくしてもらおう——そんな経験は、これまで一度もなかったから。鏡に映る自分は、まるで知らない誰かのようなだった。

「お嬢様はお肌が綺麗だからどんな髪型もお似合いになりそうで、腕が鳴ります！」

リナが楽しそうに今後の計画を練る様子を見て、クスツと笑みがこぼれた。

セレナは身支度が整うと、ソファに腰を下ろした。慣れないドレスの感触、綺麗に梳かれた髪。

リナが退席した後も先程のやり取りを反芻しては、大切に胸に閉じ込めた。

（私が、こんな素敵な部屋で、素敵なドレスを着て。……それにリナも親切だった。この見た目でも怖がらないでいてくれた）

窓の外の夕暮れでさえもいつもより綺麗に映り、ぼんやり眺めていると、コンコンと控えめなノックの音が部屋に響く。

「部屋に不備はなかったですか？」

「はい。あの、とても、素敵な部屋で……ありがとうございます」

レオンは部屋の中央にまで歩み寄りながら、ゆつくりとセレナに目を向けた。

「ドレス、よくお似合いです。先ほどは、少し突然だったかもしれませんが、改めて歓迎します」

レオンは手を差し出し、慌てて立ち上がったセレナに座るよう勧めた。

「あなたが到着する前に神殿に行つて、婚姻の手続きは書面で済ませてきました。皇帝陛下からの許可も得ています」

「え？ あ、あの、無理なお願いを聞いていただきありがとうございます」

そのお願いをした理由を追求することなく、レオンはわずかに微笑んだ。夕焼けに照らされたその横顔があまりに美しく、思わず見惚れていたそのとき。

「——なので、私たちはもう夫婦で、あなたは『セレナ・ノクティス』です」

その言葉が耳に届いた瞬間、そわそわと動いていた指がびたりと固まった。無理なお願いが通った驚きと、すでに『夫婦』だという事実への戸惑い。そして、新しいその名を呼ばれた瞬間、自分が違う誰かになったような感覚が胸に残った。

（たしかに婚約期間は不要だと言ったから、すぐに婚姻、つまり夫婦になる。相手がどんな方でもと、覚悟はしてたつもりだったけど……だけど、なんだか胸の奥が、変な感じ）

そしてそれと同時に、何故こんなに優しくしてくれるんだろう、という疑念が強まった。（身分も高いうえに、こんなに綺麗な方なのに。なんで私なの？ 何か目的がある？ 父が言っていたように、この見た目なら気兼ねなく慰み者にできるから？）

いくつかのことを頭に浮かべたが、それはすぐに消え去った。会ったばかりだというのに、この人は悪意のあることはしないと、不思議とそう思えたからだった。

「あの、こんなにしていただけでも、私は何もお返しすることができません。それに、公爵様に利益があると思えません……この婚姻には何か意図があるんでしょうか」

切実に問われたその言葉に、レオンはしばし視線を下げた。

「……詳しくはもう少しあなたがここに慣れてから、お話したいと思っています。でもこちらの目的もわからないままだと、不安でしょうから」

レオンは少し言葉を選ぶように、迷っていた。

「我が公爵家には、『呪い』が掛けられているという噂がありますが、ご存じですか？」

「……はい、少し聞いたことがあります」

そう答えた瞬間、レオンの横顔に影が差した気がした。

「実はそれは、単なる噂ではありません。実際に私の身に起きていて、最近特に体調が思わしくなく……それであなたに、この屋敷で暮らしながらその『呪いを解く手助け』をお願いしたくて求

婚状を出しました」

「え？ ……呪いを解く、手助け？」

想像もしていなかった理由に、セレナは目を見開く。胸の中でなにかが鈍くざわついた。

「突然求婚状が届き、驚いたことでしょう。ですが、未婚の貴族令嬢と一緒の屋敷に住む訳にはいきませんから。ですが、夫婦になれば一緒に生活を送れます。事前に説明すべきかと思いましたが、アルシエリア伯爵が急いでいたようなので……」

ことの経緯が淡々と、簡潔に口にされた。婚前に異性の屋敷に宿泊したとなれば、世間から後ろ指をさされ、他の家に嫁ぐことはできなくなる。

（確かに、私自身は今更外聞は気にしないけど、商品価値がなくなるからと父は婚姻でなければ許しなかったかもしれない）

「ですので、もらったばかりだとは思わないでください。私はあなたの衣食住の全てを保障します。協力関係のようなものだと思うてもらえれば。むしろ、こちらの方が申し出に応じていただいて、感謝していますので」

丁寧な、そして穏やかな口調でそう言われ、セレナは胸中に嬉しい気持ちと不安が入り混じる。

「でも、そんな。私に手助けなんて、できるわけが……お相手を間違えていませんか」

「信じがたいかもしれませんが、呪いを解く手がかりを探しているうちに、ある古い書物にたどり着いたんです。そこには『黒髪、黒い瞳を持つ者が災いを払う』と——」

セレナは、はっとして自分の髪と瞳に意識を向けた。

「だからこそあなたにしか頼めないんです。直接的な文言はなく、確証はありませんが、それでも私は……あなたに託してみたいと思ったんです」

セレナは思わず、膝の上で握った指にぎゅっと力を込めた。

「でも、ずっと、自分のせいで不吉なことが起きるって思っていたんです。私がいるせいで周囲を不幸にしようって。だからこんなに親切にしていただけでも、手助けどころか公爵様にも悪いことが起きるかもしれない……」

それは長い間、誰にも言えなかった心の奥の本音だった。

レオンはせわしなく動くセレナの瞳に視線を合わせると、静かに口を開く。

「私が呪われていると聞いて、怖いですか？ 呪いが移るのではないかと不安ですか？」

「え？ いえ、それは全然。あの……噂は噂ですから」

（ずっと噂話や言い伝えのせいで不吉と蔑まれてきた。その辛さは、よくわかるから）

セレナが迷うことなく否定する様子を見て、レオンはふっと優しく微笑んだ。

「ふふ、そうですね。噂なんて当てになりませんよね。そのままあなたにもそう返します。心配しなくていいんです。不吉なことが起こるなんて、私は少しも思っていないです」

その瞳も、声も。どこにも棘はなく、ただ、温かった。

「私は噂や言い伝えじゃなく、目の前にいるあなたを信じてみたい」

その言葉は、セレナの胸の奥に、そっと染み込んでいった。ずっと誰かに言ってほしかったその

言葉に、無意識のうちにぼつりと水滴が頬を伝った。

レオンは少し驚いたように目を見開いたが、すぐに胸元からハンカチを取り出し、そっと拭ってくれた。何も聞かずに涙が落ち着くのを、ただただ待ってくれていた。

「……ありがとうございます。あの、それで具体的には何をしたらいいでしょうか？」

全てを理解できた訳ではなかったが、一人の人間として接してくれるこの人のために、少しでも力になれば。会って間もないのに、セレナはそう思い始めていた。

「まだ何をしたらいいかわかっていなくて。だからこそ、一緒にこの屋敷で生活していただきたいんです。そして私と、色々試してみてくださいませんか？」

困惑するセレナを宥めるように、レオンは落ち着いた声で続けた。

「気負う必要はありませんし、絶対に呪いを解いてほしいとも思っていないです。役目など考えずに、まずはゆっくり屋敷で過ごしてください」

その言葉に、もしかしたら自分にも役に立てることがあるのかもしれない、と胸が高鳴った。なにと胸の奥がむず痒い感覚のまま、沈黙が落ちたその時。

「んにゃ」

小さな声とともに、ふわりとセレナの膝の上に黒猫が飛び乗った。レオンが目を細めて猫を見つめた。

「この子、懐いてるんですね」

セレナは頭を撫でながら、少し迷って口を開く。

「この子の名前。もしよければ、一緒に考えていただけませんか？」

「名前を？　そうですね……」

レオンは一瞬、考えるように視線を落とし、それからふと黒猫の毛並みに目を留めた。そして、猫とセレナを交互に見つめた。□元がわずかに揺れる。

「美しい」

そう言われた瞬間、ぎゅっと音を立てて心臓が縮まった気がした。セレナが固まるのを他所に、レオンは言葉を続けた。

『『ベル』という名はどうでしょう。美しいという意味もあるそうです』

「あ……私のことを言ってるのかと思った」

思わず小さな声が漏れる。レオンはわずかに目を見開き、それからほんの少し□元を緩める。

「そうかもしれませんね」

その一言に、再びセレナの心臓が飛び跳ねる。頬が熱を持つのがわかる。視線を合わせるのが恥ずかしくて、小さな混乱とときめきが、胸の奥で花開いていくようだった。

「……ベル。気に入りました」

穏やかな空気が流れ、沈黙さえも心地よく感じていたその時、レオンは立ち上がる。

「では、夕食まで時間がありますので、それまで休んでください。お茶を用意させます」

セレナは、思わず口を開きかける。何かを話したい、もう少しだけこの穏やかな時間に身を置いていたい。けれど、言葉がうまく出てこなくて、咄嗟に手を伸ばす。

「あのっ」

伸ばした指先が、レオンの手にかすかに触れた。その瞬間、ふっと何かがほどけたように、胸の奥の重さが、少しだけ軽くなったのを感じた。

（何、これ……不思議な感覚）

一方のレオンも、その小さな手のぬくもりにわずかに眉を動かした。

「ごめんなさい、つい」

レオンは触れた手に視線を落とし、そしてゆっくりとセレナの黒い瞳を見つめた。

「なんだか体が楽になった気がする」

セレナが驚き声を漏らすと、レオンはしばし沈黙ののちに、やわらかく口を開いた。

「お茶は後ほどにしてもう少し、ここで話しましょう。隣に、行ってもいいですか？」

言葉に詰まりながら、セレナは視線を彷徨^{さまよ}わせた。だが、やがてセレナはレオンを見上げて頷いた。レオンはゆっくりとセレナの隣に腰を下ろす。並んだ距離は、ほんの僅か。肌が触れている訳でもないのに、熱を感じるほどだった。

（どうしよう。恥ずかしくて、顔を見られない。もし今、目が合ってしまったら……このドキドキが全部、伝わってしまいそうで）

恥ずかしさの余り、レオンの方を向くことができずにいると、ゆっくりとレオンの顔がこちらを向いた。

「名前で呼んでも？」

低く落ち着いた声でそう尋ねられた。少し目を伏せながら、短く「はい」と返事をする。

「セレナ」

耳元で囁かれたその声に、心の奥が震える。思わず顔を向けた瞬間、距離の近さに息を呑んだ。誰にも呼ばれることのなかった、自分の名前。

（何かおかしい。心臓がドキドキいつて……）

すぐそこにある透き通った瞳。それが自分だけを映しているようで、目が離せなかった。

「さっき、あなたの指が触れた時、少しでも体が楽になりました。やっぱり、あなたには何か、特別な力があるのかもしれない」

「そんな、私の力……？ でも、触れただけなのに、私も体が軽くなった気がして……」

その不思議な現象にふたりで顔を見合わせた。

「……もう一度、確かめてもいい？」

セレナは息を呑みながら、頷いた。レオンの手が自分の手に優しく重なる。セレナは何も言えないまま、レオンの手を握り返した。生まれて初めて人と手を繋いだ。

ごつごつとした大きな手。けれど、彼の手は驚くほど美しかった。骨張っているのに、節や爪の先まで洗練されていて。触れているだけで、心の奥がふるふると震える。心が騒がしいまま視線を泳がせていると、長い指がセレナの指の間へずりりと絡まった。

「……っ！」

息が止まりそうになった。それはただの手の重なりではなく、まるで特別な証のような繋ぎ方

だった。言葉にならない程の、ときめきと、戸惑いが入り混じる。

「やっぱり、あなたに触れると体が楽になるみたいだ。ありがとう」

低く、すぐそばで紡がれたその声が、指先から自分の中に染み込んでくるようだった。

（なんでだろう。さっきもそうだったけど、公爵様に触れたら私も体が楽になる）

手を重ねた瞬間、身体の奥底に溜まっていた重たいものが、少し抜けたように感じた。いつも感じていた息苦しさや怠~~だ~~さが、ほんの少しだけ軽くなる。セレナはその感覚に戸惑いながら、手元に視線を落とした。

（体も楽だけど、それ以上にもっと……触れていたい。すごく落ち着く）

これまでの人生で、誰にも向けたことのない想いだった。握られた手から伝わってくるものが、自分の存在を肯定してくれているような、そんな気がした。

「不思議ですね。今日初めて会ったというのに、あなたという心地がいい」

セレナは驚いたように顔を上げ、レオンの瞳を見つめる。レオンはほんの少し、言葉を探すように視線を落とす。そして意を決したように再び、セレナの瞳を見つめた。

「あの、一日に一度だけいいので、あなたの手を握ってもいいでしょうか」

——その日の夜。セレナは寝台の上で膝を抱きながら、胸の高鳴りをどうにか抑えようとしていた。諦めと不安の中、公爵家にやってきたというのに。思い出すのは、あの穏やかな声色、大きな手のぬくもり。そして、ずりりと絡んできた、あの長い指先。

「どうしよう。私、どうしちゃったの」

今日初めて会ったばかりなのに。声も、瞳も、名前を呼ばれた時の感覚も、すべてが頭から離れなくて。呼吸も、鼓動も、いつもよりずっと騒がしくて。頬がまだ、熱を持っている気がしてならなかった。

セレナは胸の奥に芽吹いた感情を、大切に両手で抱きしめるように眠りについた。



翌日、執務室。先代の公爵から仕え、レオンとは兄弟のように育った従者のアレク・ロイエルはため息を吐いた。閣下が食事を取らずに執務室にやってきたのだ。

「全く、食事は取ってくださいよ。奥様には食事の席に行かないと声をかけたんですか？」

『奥様』という単語を聞くなり持っていたペンをぼとりと落とすレオン。

「……あ、すまない。リナに伝えた」

レオンはペンを持ち直し、書類に目を通していた。が、内容はほとんど頭に入っていないようだった。

「閣下、ずっと同じ所をご覧になっていますが」

レオンは曖昧に返事をし、ようやく視線を動かし、ゆっくりと手元の書類を伏せた。

「昨日、聖女様——奥様とは、うまくお話できましたか？」

「ん？ ああ、話した」

曖昧な返事にアレクは驚く。ぼんやりするなど、普段ならありえない。そしてレオンは、不意に自分の右手をじっと見つめたまま、ぼつりと呟いた。

「手に、触れたんだ」

（え、手？ それだけでこんなことに？ 一応昨日『初夜』だったよな）

ぼかんとしながらも、アレクは口には出さず、いつもの調子を保ち咳払いをした。

「なるほど。それがどうかしましたか？」

「体が、少し楽になった」

その一言に、アレクの目がぱつと見開かれる。

「接触が鍵だったんですね！ 呪いの影響が弱まったなら、本当によかった。最近調子が悪い日が多かったですから」

レオンは軽く頷いた後、再び静かに視線を落とす。

「でも、苦しくて。胸のあたりが、ずっとざわつく。理由がわからないんだが」

アレクは書類を手にとったまま、しばらく沈黙した。思っていることを声に出すのは控え、ただ息を吐きだした。

「それに、全てを話していないのに、彼女を利用しているようで……」

「……突然『あなたは聖女です』とは言えませんかね。それでなくとも、突飛なお願いをしてるんですから。切羽詰まっているとは言え、急に求婚状を出すと言い出した時は焦りましたよ」

そう小言を漏らしながら、資料をレオンの前に置くとアレクは執務室を出ていった。

静かになった執務室で、レオンは昨日のことを思い出していた。

呪いに掛かった瞬間からずっと苦しめられてきた体の痛みが、セレナに触れると楽になった。呪いが消えたわけではないが、それは確かだった。

そしてその後、セレナは自身が元々病弱で常に体調が悪かったと言っていた。それなのに手が触れた時、セレナも自分の体が軽くなったと口にしていた。

偶然にしては、一致しすぎている。まるで、触れ合うことでお互いの苦しみを和らげているかのように思えた。

（詳しいことは伝えられなかったが、やはり、彼女が『聖女』なのか？）

もっと触れていたいと思ったのは、呪いを緩和させようと本能的に求めてしまったのだろうか。

それとも、単純に、彼女に触れたいと思ってしまったからなのか。そんな考えが頭をよぎり、すぐに振り払う。

「よからぬ噂に傷付けられる彼女の姿が、自分と重なったただけだ。ただ、同情しているだけ……」

呪いを解く調査で見つかった古い文献には、『禍を招く』とされている黒髪と黒い瞳は『聖女の証』だと記されていた。たった一文に過ぎなかったが、確証もないままに『黒髪に黒い瞳の者を探せ』とアレクに命じ、彼女に行き着いた。そして調査の末、伯爵家での扱いを知ることになる。

実際に彼女を見ると伯爵家での不遇を端々^{はしはし}に感じた。不完全な旅支度と装い、用意したドレスに戸惑う仕草や、言葉に詰まる姿。それに自信のない様子。それなのに、自分の口から不遇を語るこ

とはなかった。傷ついてきたはずなのに、レオンの身を案じていた。

それに『呪いを解く手伝いをしてほしい』なんて曖昧なお願いにも向き合おうとしてくれた。今まで地位や名誉を目的に近づいてくる者、逆に呪いを恐れ蔑む者はたくさんいた。だが、セレナからは全く打算など感じられず、ただ、まっすぐに俺を見つめ、手を差し出してくれた。不吉とされる髪と瞳が、とても繊細で美しく見えた。

「あの瞳を見て……守りたい、と思ってしまった」

婚姻はただ呪いを解くための手段に過ぎないと思っていた。感情など交えず、ただ目的のために動こうと。彼女がどんな人生を歩んできたかを知った上で、伯爵家で何不自由なく過ごせるようにすれば、彼女も救われるのではないかと求婚状を出した。そして、愛情はなくとも親切に接して、いい協力関係を築こうと。

それが公爵としての判断だった。そして、性急に行動してしまうほど、呪いの状況もまた、深刻なことも確かだった。

（なのに。なんでこんなに気になるんだ）

ほんのひと時一緒に過ごただけなのに、もっと触れたい、もっと知りたいと願ってしまっている。レオンはその理由を、呪いのせいにして胸に押し込めた。



光が差し込む部屋で、セレナは目を覚ました。窓の外には既に太陽が高く昇っていた。

そっと身を起こし、いつの間にか傍に準備されていた洗面道具に手を伸ばす。軽く身支度を整えると、ちょうどリナが朝食の盆を運んできた。

「おはようございます。疲れは取れましたか？ 閣下が、長旅の疲れもあるだろうから、朝は無理に起こさないようにと仰ったので、ゆっくり参りました」

リナが朝食と紅茶運び、セレナにそっと差し出す。そして不満げに声を漏らした。

「もう奥様、身支度も私がしますのに」

「お、奥様!？」

聞きなじみのない『奥様』という言葉に思わず声が漏れた。

紅茶を零しそうになるセレナにお構いなしに、リナは笑顔で続ける。

「実は、閣下から婚姻が成立したと伝えるまで、お嬢様と呼ぶように言われてまして。奥様と呼ばれたら戸惑うだろうから、と。奥様のことを想っておられることがよくわかります」

セレナはレオンの優しい気遣いに、また心が動くのを感じた。

「リナ、気持ち嬉しいんだけど……少し恥ずかしいから名前で呼んでくれる?」

「はいっ！ ではセレナ様とお呼びしますね」

それから屋敷を案内してもらい、平穩に日中を過ごした。それなのに、夜が近付くにつれて胸がまた、騒がしくなる。

（一日一回って言ってたし、今夜も公爵様は来てくれるだろうか）

静かに待っていると、そっと扉がノックされる。

「こんばんは。旅の疲れは取れましたか?」

そう言いながらレオンはセレナの隣に腰掛ける。心臓が一層早く音を立て始める。

「は、はい。昨日はぐっすり眠っていました。リナも親切にしてくれています」

そう答えるとレオンは穏やかに微笑んだ。昨日と変わらぬ優しい表情にほっとする反面、その平然とした姿に、セレナは何かが胸につかえた。

（昨日のこと、何とも思っていないみたいなお表情。こんな素敵なお方だし、慣れているのかな。ドキドキしてるのは私だけなのかもしれない）

そんなことを考え込んでいると、レオンの手がずっと伸びてくる。

「手を、繋いでもいいですか」

また胸が音を立てる中、セレナは小さく頷いた。そして、レオンの指が静かにセレナの指の隙間を撫でるように這っていく。絡み合った場所がぞくぞくとした感覚をもたらす。

「やっぱり、体が楽になる。今日もありがとう、セレナ」

低く落ち着いた声が耳元で響き、胸の奥がふるふると揺れる。

（だめ、私も普通にならないと。これは公爵様の体調のためなんだから）

何とか胸の高鳴りを抑え、何気ない感じを装う。

「わ、私もです。……ずっと、触れていたいくらい」

かすかに呟いたその言葉に、レオンの手がぴくりと動く。視線を上げると、彼の眼差しが揺れた気がした。思わず、自分からぎゅっと強く握り返した。

それからセレナは、新しい毎日を過ごしていた。ベルと屋敷を探検したり、リナとお茶をしたり。そして夜眠りにつく前には、レオンが部屋を訪れ、そっと手を握り合う。相変わらず胸の高鳴りを抑える毎日だけれど、そんな穏やかな日々が、少しずつセレナの日常として塗り替わっていった。

ある日の午後、セレナはリナと庭園に来ていた。柔らかな日差しの中、手入れをされた生垣の周りをゆっくりと歩く。リナは手に籠かごを持ち、花壇の前で足を止めた。

「いつもお部屋に飾っている花は、庭園から摘とんで届けてもらっているんですよ」

公爵邸の庭園には色とりどりの花が咲いている。庭師が丁寧に世話をしているのだろう。

「セレナ様、許可はもらっているので、好きな花をお部屋に飾る用に摘みましょう」

リナからそう言われ、セレナは興味津々で歩き回っては、香りを楽しんでいた。ふと、白いバラが目にとまった。陽光に照らされて輝く姿が、レオンの髪の毛を思わせた。銀色の光を纏ったバラに吸い寄せられるように手を伸ばした瞬間、リナの手が伸びてくる。

「セレナ様、バラは棘がありますから、私が摘みます」

リナはハサミを片手にバラに手を伸ばした。丁寧に一本ずつ。籠かごの中が満たされる。そしてもう

一本摘もうとした時、リナが手を引き、小さく声をあげた。

「痛っ！」

棘が指に刺さり、リナの指先には赤いしずくが小さく浮かび上がった。セレナはすぐに手を取ろうとしたが、リナは慌てて手を引いた。

「大丈夫です。ちよっと当たっただけですし、それに、汚いので……」

「そんなことない、見せて」

間髪をいれず発せられたその声は、静かだが揺るぎがなかった。セレナはリナの手を、優しく掴む。するとその瞬間、指先から光が一瞬だけ花弁のように広がって溶けていった。

その光景を見て、固まっていたリナが声を漏らし、目を見開く。

「痛く、ない。な、何で……？」

セレナもまた戸惑っていた。何をしたわけでもない、ただリナの手に触れただけなのに。

「セレナ様、今、何を？」

「……わからない。それより、リナは大丈夫？」

「は、はい、大丈夫です。そこで付いた血を流してきます。すぐ戻ります」

リナは困惑しながらも感謝を伝え、すぐ近くにある流し場へと向かった。セレナはドレス姿のままその場に座り込み、震える手を見つめた。

（また私が何かした……？ リナ、驚いた顔をした。せつかく仲良くしてくれたのに、気持ち悪いって思われたかな。怖がらせてしまったかもしれない）

指先に残る感触を辿るように思い返していた。そのとき、リナがばたばたと戻って来た。

「セレナ様、ありがとうございます。傷も残っていないんです。本当に、奇跡みたい」

そう言って、リナは棘が刺さっていた指先を見せてくれた。綺麗に洗い流されたその指には、傷は見当たらない。セレナは胸を撫でおろしながらも、俯いた。

「……リナ、ごめん怖がらせてしまつて」

震える声を絞り出すと、リナは屈んでにこりと微笑んだ。

「とんでもない、少し驚いただけです。初めてお会いした日も申し上げましたが、セレナ様を怖いと思うことは絶対にありません」

リナはそつとセレナの手を包み込んだ。

「それに何より一番に私の心配をしてくれて、ご自分よりも私が怖くなかったかと気にかけてくださつて。本当にお優しい方です。こんなに私を大切に下さつて、幸せです」

リナの瞳には恐怖の色はなく、握ってくれた手の力強さがそれを感じさせた。自分でもまだこの力についてはよく分からない。それでも、避けられるのが当たり前な人生だったのに、傍にいてくれる人がいると思うだけで、前を向ける気がした。



日が暮れ夜を迎えようとする頃。レオンは自身の執務室に、リナを呼び出した。

「セレナが公爵家に来てしばらく経つが、困っている様子はないか？」

気になる気持ちを抑え、平静を装って尋ねると、執務机の前に立つリナは小さく首を横に振り穏やかに笑った。

「いいえ、毎日楽しいと仰つてましたよ。初めてお目にかかったときから神秘的で美しい方でした……最近、お食事でも沢山召し上がっていますし、それに加えて表情も柔らかく、顔色も明るくなりました」

レオンはふつと目を伏せ、静かに息を吐いた。息を潜めていた不安がほどけていく。レオンの安堵した表情にリナも一瞬頬を緩めたが、昼間のことをふと思い出す。

「あの、本日不思議なことがございました。閣下にはお話しすべきかと思ひまして」

リナは一瞬ためらうそぶりを見せたが、何かを決意したようにもう一度口を開いた。

「庭園でバラを摘む際に不注意で指を傷付け、セレナ様が私の手を取ってくださいましたが、傷が……一瞬で癒えたのです。まるで、最初から何もなかったかのように」

静寂が室内を満たす。レオンの碧眼が、微かに揺れた。

「セレナ様も動揺していたようですが、一番に私のことを気にかけて下さいました。本当に優しく、愛情深い方で……これからも誠心誠意お仕え致します」

「報告ありがとうございます。アレクから事情は聞いていると思うが、引き続きセレナのことを頼む」

リナが執務室を出ていった後、レオンは静かに立ち上がり窓辺に腰を掛けた。

セレナが今まで家族だけでなく、使用人からも受けて来た仕打ちを知っているからこそ、彼女に

仕える人間は最小限に留めている。リナは以前から公爵家に仕えていた。セレナと年齢が近いこと、人当たりのよさ、公爵家の噂を気にする様子がなかったことから、アレクが専属侍女に推薦してくれた。

「知らない間に、随分と親しくなったんだな」

セレナがリナと打ち解けている様子に胸を撫でおろす。

（それにしても傷の件……やはり、セレナに『聖力』があることは間違いない）



夜が静かに屋敷を包み込む頃、セレナの部屋に控えめなノックの音が響いた。夜、セレナが心待ちにしている時間。『どうぞ』と答えた声は、自分でもわかるほどに緊張している。入って来たレオンと視線が合うと、また胸が高鳴った。

「セレナ、今日は何をしたんですか？ ベルがさつき、執務室までやってきました」

「ふふ、今日はリナと庭園に行きました。ベル、見かけないと思ったらそんな所まで……」

レオンはそつとセレナの手に分の手を重ねた。最初はぎこちなかったふたりの会話も、回数を重ねるごとに日常へと溶け込んでいった。その日にあった出来事や、何気ない話をするふたりだけの時間。セレナにとってそれは何よりも特別な瞬間だった。

「そういえばリナがセレナは最近顔色が明るい……とても、嬉しそうに話していた」

セレナの視線を下からすくい上げるように、レオンが身を乗り出した。

「本当に……顔色がいい」

囁くような声に、セレナが戸惑った瞬間、レオンの指先が、音もなく頬へと伸びてきた。

「……っ！」

長く綺麗な指が、ためらいがちに、けれど確かに触れた。その動きはあまりにもゆっくりで。まるで、このぬくもりを記憶に刻みつけるかのように、指先が輪郭に沿っていく。

（初めて手以外に……そ、それに、なんだかいつもと雰囲気、違——）

呼吸が、浅くなる。頬を撫でられているだけに、そこから熱が全身へ伝う。くすぐたいような、狂おしいような甘さに、セレナの睫毛が震えた。視線がレオンの瞳と重なって、息が詰まる。その碧眼は、ふだんの冷静さを一片も残していなかった。

「セレナ」

掠れるように名前を呼ばれた瞬間、レオンの顔がゆっくりと傾く。数センチずつ唇へと近づいてくる。胸が苦しいほど高鳴って、指先が小刻みに震えた。

だが、触れる直前、あとほんの少しというところで、レオンの動きが止まった。彼の瞳が何かに気づいたように揺れ、そつと、名残惜しそうに目を伏せる。触れていた指が、まるで後ろ髪を引かれるように、静かに頬から離れた。

「……すみません。少し、頭を冷やします。おやすみなさい」

絞り出すようにそう呟くと、レオンは立ち上がり、扉の外へ向かった。扉が閉まる音と共に、静

寂が訪れる。部屋にひとり残されたセレナは、唇に手を当てぼつりと視線を落とした。

「……口付け、してしまうのかと思った」

すべてが身体の奥に焼き付いていて、離れなかった。その手が頬に触れた瞬間も、見つめられた瞬間も、吐息が触れたときも。

「して、欲しかった……」

胸の奥でくすぶっていた、小さな想いの輪郭がはつきりしていく。ずっと一人で寂しかったからじゃない。彼を救いたいという想いだけではない。

「やっぱり私、公爵様のことが好き……みたい」



自室に戻ったレオンは、扉に背を預けたまま深く息を吐いた。まだ、胸の鼓動が速い。

「はあ、どうかしてる」

セレナの頬に手を伸ばしたあの瞬間。ただ、顔色を確かめるつもりだった。それなのに目が合った時、言葉にならない衝動が喉の奥を焼いた。

（昼間の出来事を聞こうと思っていたのにすっかり忘れて、あんなこと……）

彼女に触れたいと思ってしまるのは、自分の体が楽になりたいからだ、と自分自身に何度もそう言い聞かせてベッドに身を任せた。

風が柔らかく吹くある午後、庭園の花壇の前でしゃがみ込むセレナの姿が目に入った。アーチの陰から無邪気に笑うセレナの様子を見かけたとき、レオンは思わず隠れていた。何故わざわざ隠れたのか、理由はわからない。けれど、セレナが視線の先にいるアレクに笑いかけていたのだ。

（なんでアレクにあんな顔……）

気付けば、指先に力がこもっていた。セレナのあんな笑顔を見たのは初めてだった。

（俺の前ではいつも緊張しているようだし）

アレクが微笑みながら何かを言った。セレナがまた笑った。その一連のやり取りからなぜ目を逸らしたくなるんだろう。なぜ、心が落ち着かないんだろう。答えを出す前に、足早にその場を離れ執務室に戻った。

机に向かった後、レオンは書類に目を落としても、手を一向に動かさなかった。

「失礼します、閣下。書類をお持ちしましたよ」

いつもの調子でアレクが執務室の扉をくぐった。先程のことなど何もなかったかのように、落ち着いた表情で報告書の束を手を歩み寄ってくる。アレクは机に書類を置いたあと、ふとレオンの顔を見て、あからさまにニヤリと笑った。

「庭園で何故声を掛けてくださらなかったんですか？ 近くにいたの見えてましたよ」

「……さっき、セレナと何をしていた？」

「話をしていただけです。花の話とか。奥様、楽しそうに笑ってらっしゃいましたね」

レオンのペンを握る手に力が入る。アレクはそれを見て、心底楽しそうに肩をすくめた。

「——もしかして、閣下。嫉妬、ですか？」

「うるさい。早く戻れ」

「はいはい。奥様に会ってから毎日こうですかね。いい加減認めたらどうですか」

レオンは無言のまま何かを押し殺すように机に視線を落とす。

「まあ、閣下にとつては耐えがたい苦痛を取り除いてくれる、ただ一人の存在ですからね。好意を持ってしまうのは当然ですよ」

「……………それだけじゃない」

レオンが不機嫌そうにそう返すと、アレクは手で口元を隠しながら口角を上げる。

「そうですね。私ども使用人に対してもお優しい上に、お綺麗ですもんねえ」

「そうだ。これまでひどい目に遭ってきたというのに、なぜあんなにまっすぐに他人のことを——つ、いいから早く戻れ」

「はいはい。その熱い気持ちを奥様にどうぞお伝えください。では」

アレクは自分の言いたいことをさりとて言い残して、執務室を去っていく。そして、去り際に誰にも聞こえないほどの小さな声で、アレクはぼつりと呟いた。

「ふたりで、あなたの話をしていたんですけどね」

その日の夜も、変わらずレオンはセレナの部屋を訪れた。ソファの上に座っていたセレナは、微

笑みながらそつと手を差し出した。その手を取ることはレオンにとつても、既に日常になっていたはずなのに。けれど今夜は、何かが違っていた。

ごく自然なふりをして手を取ったのに、彼女の手に触れた瞬間、レオンの中に残っていた『認めたくない気持ち』が少しずつ、じわりと溶かされていく。

ふと、昼間の庭での光景が脳裏に蘇る。アレクと笑い合うセレナ。見たことのない表情。そして、自分の胸に広がった、どうしようもないざらついた黒い感情。

（あの笑顔がアレクに向けられたと思った時、俺は……）

『嫉妬、ですか？』

アレクの言葉が思い出され、慌ててそんなはずないとまた否定した。でも、否定すればするほど、余計に気持ちが浮き彫りになってしまう。セレナが誰に向けて笑っていたかなんて、気持ちがなれば関係ないはずだから。

（感情を排そうと思ったのに、もう誤魔化せない。……否定できない）

この手に触れたいのは、自分の体が楽になりたいからだけではない。あの時、無意識に唇に触れようとしたのは——彼女に触れたくてたまらなかったから。

「セレナ」

名前を呼ぶとセレナは、いつものように、安心したように微笑んでくれる。その表情に、胸が苦しい程に押しつぶされる。

（……やっぱり、俺は——）

ようやくはっきりしたその感情は、たった一言で収まるほど、軽いものではなかった。気づいた瞬間から、もう抑えられないほど膨れ上がっていく。触りたい。もっと、深く。小さな手も、声も、心も、全部——独り占めしてしまいたい。



セレナは自分の気持ちに気付いてから、新しい感情にあたふたする日々だった。食事の席で顔を合わせる時、執務室に入っていく後ろ姿が見えた、そんな些細な時でさえも。

こんなに特別な感情を抱くのはやはりレオンにだけだった。

「リナ。公爵様って、誰か思いを寄せてる人……いるのかな？」

セレナは部屋で刺繍の糸を通してながらぼつりと呟いた。一緒に刺繍をしていたリナもびたりと手を止め、ワクワクした表情でセレナを見つめる。

「セレナ様以外にいらっしゃると思いますか？ お忙しい方ですし、私の知る限り、浮いた話はないです。でもセレナ様が来られてから、口数も増えましたし、よく笑うようになりましたよ」

その言葉に、ドキドキと心臓が動き出す。けれど、ふと頭によぎる。

（それは私に不思議な力があって、体が楽になるからで……）

落ち着かず、刺繍の針を置き、ベルの柔らかな背を撫でる。

（でも、あの日、唇が触れそうになった時の公爵様の表情——）

セレナはきゅつと目を瞑り、気持ちを落ち着かせると、雑念を振り払うように手を動かした。夜、ふたりきりで過ごせる時間を楽しみに待ちながら。

そして、一人そわそわしながら訪れた夜。いつものように、そつと扉をノックしてくれるはずの時間。けれど、今夜はまだ、その気配がなかった。

（どうしたんだろう、遅いな……もしかして、何かあったんじゃない）

心配が膨らみ、セレナはためらいながらも、レオンの部屋へ向かった。控えめに声をかけ、返事がないことを確認すると、そつと扉を押して中に入った。

「公爵様？」

部屋の奥——倒れ伏すレオンの姿を目にした瞬間、セレナの心臓は大きく跳ねた。急いで駆け寄って顔を覗き込むと、彼の額には冷たい汗がにじんでいた。震える手でレオンの体を起こし、汗をぬぐいながら呼びかける。

「公爵様っ、大丈夫ですか？」

その声に、わずかにレオンの睫毛が揺れた。

「……セレ、ナ？」

途切れ途切れに名前を呼ばれた瞬間、セレナはハッとしてレオンの手を握った。

（熱があるのに、でも体が冷えてる——）

いつもの温かい手ではなく、冷え切った指先。握り返す手の力も弱々しい。レオンが目を細め、かすかに微笑む。

「ありがとう。少し、楽になった」

そう礼を言われたが、それでも呼吸は浅く、胸が早く上下している。

「あの、薬とお水をお持ちします」

そう言って立ち上がろうとした時、レオンがセレナの手を引いた。バランスを崩し、レオンの胸に倒れ込んでしまう。すると、レオンの腕が背に回りそのままきつく絡んだ。

「っ、行かないで。……そばにいて」

吐息混じりで、震えるような切実な声。セレナはそっと、レオンの首に腕をまわした。レオンの身体を、少しでも温めるように。

「こうしてると……痛みが和らぐ」

その言葉に安心しながらも、レオンの湿った吐息が首筋を撫で、震える指先が背中に絡みつくと、全身が甘く痺れるようだった。

（触れられてる所、全部熱くて、気持ちいい）

腕に包まれている、それだけなのに体が楽になり、今まで味わったことのない安心感と幸福感を感じた。そしてセレナはその理由が、ようやくわかった気がした。

（抱きしめられると、全然違う。もっと深く触れたら……きっと公爵様も、楽になる）

本能が、疼くように訴えてくる。そして、ふいにあの夜の記憶が、熱を帯びて蘇る。

（公爵様と唇が触れそうになった時、触れたかった。もし今触れたら……）

考えるだけで、胸が苦しい。それでも、自然と口から言葉が漏れていた。

「公爵様。もっと深く触れたら、楽になりますか？ あなたを、楽にしてあげたい」

セレナはレオンの腕の中から、ゆっくりと身体を離れた。震える指先をレオンの頬へ、恐る恐る伸ばす。指が触れた瞬間、びくりとレオンの肩が震えた。頬を手で包んだまま、セレナの親指が、ゆっくりと彼の唇に触れ、なぞる。

（公爵様の唇、柔らかい）

熱い感触。彼の荒い吐息が指に掛かる。それだけで、身体の奥が甘く疼いた。セレナはゆっくりと身を傾け、その柔らかな唇へ近づいていく。触れそうになった、そのとき。

「だ、ダメだ。今は」

レオンが、かすれた声で制し、セレナの肩を押し返した。

「セレナ……君のこと、大切にしたい。でも、今触れたら多分、止まらない」

その苦しげな声音が、彼の奥底にある欲望を、はっきりと物語っていた。

「止めなくて、いいです。だって、私たち……夫婦でしょう？」

声がわずかに震えていたのは、緊張とそれ以上の想いのせい。

「私も、触れたい。公爵様にもっと、近づきたい」

そう言って、ゆっくりと、彼の胸元に手を添える。もう、ためらいも戸惑いも超えて。ただ、想いのままに。そっと目を閉じて、その唇に口づけを落とした。

（変な気分……気持ちよくて、なんだか体も軽い）

触れた部分がジンジンと熱を持ち、ぼんやりした頭で唇を離す。そっと目を開くと視線が合った。

レオンの瞳の奥に、熱が宿っているのが見えた。

「もう一回」

その囁きと同時に、レオンの手がセレナの頬をそっと包み込む。吸い寄せられるようにふたりの唇が、重なった。今度のキスは、先ほどのように優しくない。

思わず、セレナの喉からかすかな声が漏れる。それを飲み込むように、レオンの唇が、深く重ねられていく。セレナの唇を、そっと挟むように、丁寧に、やわらかく包み込むように。夢中で唇を重ねていると、柔らかくて湿ったものが、セレナの唇の隙間をなぞった。

「……っ！」

驚いてセレナが口を開くと、舌と舌が触れ合った。その瞬間、体の奥がぎゅっと音を立てた。初めて知る感覚。甘くて、蕩けそうで、何も考えられないくらい心地いい。唇の奥でぬるく柔らかい感触が絡まり合い、くちゅっと小さな水音が耳元で甘く響く。

「セレナ、名前……呼んで」

お互いの吐息が喉から漏れる中、そう囁かれ、セレナの瞳がふるふると揺れた。途端に、胸の奥がきゅうつと締めつけられるような、くすぐったい熱で満たされる。

「レ……レオン」

唇が離れ、恥ずかしさの余り目を逸らし呟いたその瞬間、レオンの瞳が揺らぐ。また唇が重なり、舌が絡むたびに湿った音が静かな寝室に響いた。

「は、あっ……レ、オン」

セレナが名を呼ぶ度に、レオンの動きが僅かに深くなる。唇の角度を変えながら、唇の縁を舐め、舌先で内側をなぞる。ひとつひとつの動きに、体がびくと反応してしまう。

（気持ちいい……まだ、離れたくない）

セレナがそう思った瞬間、レオンの唇が、ゆっくりと、糸を引いて離れていく。

「っ、ありがとう、すごく楽になった……」

レオンの冷たかった指先は熱を取り戻し、顔色もよくなっていて、セレナは胸を撫でおろした。すると、レオンは急に『ごめん』と呟き我に返ったように身を離れた。

「……君のことを想う気持ちが大きくなりすぎて、止められなかった」

レオンの震える指がセレナの頬をなぞる。

「君に、どうしようもなく惹かれてる。優しくさ、その笑顔も。全部、欲しくなる」

そう言っ、レオンは目を伏せたあとに、ゆっくりとセレナの瞳を見つめた。

「セレナ、君のことが好きだ」

静かな部屋に、ふたりの鼓動だけが響く。セレナは少しの間だけ、何も言わずにレオンを見つめていた。そしてぼたり、と一粒の涙が頬を伝った。

「こんなに幸せな気持ち、初めてで。私も——」

胸がうるさいくらいに高鳴る。初めて口にするその言葉を、唇を震わせながらも絞り出す。

「……好き」

それは小さな声だったけれど、確かに響いた。今まで誰にも言えなかった想い。レオンは気持ち

を受けとめるようにその涙を指先で拭った。

「ありがとう、セレナ。先に想いを伝えたかったのに、順番を間違えてしまつてごめん」

レオンは先程とは違い、セレナの唇に触れるだけのキスを落とし、そっと抱きしめた。胸の奥からあふれるように、幸せが広がっていく。

ぬくもりに抱かれながら、セレナはレオンに身を預けて意識を手放した。

次に気が付いた時、どれくらい眠っていたのか、朝になっていた。セレナは目を開け、しばらく天井を見つめていた。シーツに包まれ、ようやくここがレオンの寝室だと気付く。

（あれ、あのまま寝ちゃったのか……つて、一緒にベッドで寝てたの!）

すぐ隣にはレオンが、穏やかな寝顔をこちらに向けて眠っている。無意識のうちに身を寄せてしまっていた自分に気付き、セレナは慌てて息を潜める。

「昨日のこと……夢じゃ、なかったんだ」

『好きだ』と言ってくれたことが自然と反芻される。セレナはそっと、レオンの銀色の髪に指を伸ばす。さらに、と指先で撫でると、青く澄んだ瞳がゆっくりと現れた。

「ん、おはようセレナ」

目が合った瞬間、セレナの心臓が跳ねた。レオンの声はまだ眠たげで、けれどどこか安心したような柔らかい表情だった。セレナは慌てて髪に触れていた手を引いた。

「ご、ごめんなさい。綺麗だったから、つい」

「ふふ、怒るわけない。君に触れられるのは嬉しいから」

レオンは緩んだ表情のまま、セレナの頬に触れた。そのぬくもりに、ドキドキしながらもセレナは微笑み返した。心地よい沈黙の後、レオンはゆっくりと身を起こすと静かに口を開く。

「すぐ体調がいい。ありがとう、セレナ。まさかこんなによくなるとは思わなかった」

「私もやっぱり体が楽で……昨日、く、唇が触れた時は特にそうでした」

その言葉を聞くと、レオンは思い出したかのように顔を赤らめた。

そして、レオンは少し考えた後に静かに言葉を紡いだ。

「セレナ、まだ君には曖昧にしか話せていなくて……話を聞いてほしい。まず、昨日の熱は発作なんだ。以前少し話した、公爵家に受け継がれてきた呪いの——」

レオンは目を伏せ、静かに語り始めた。

「いつから始まったのか、誰が何のためにかけたのか、詳しいことは分かっていない。ただ、『公爵家の男児は皆、呪いの影響で早くに命を落とす。そして、先代が亡くなると次の代に呪いが受け継がれる』という事実が長らく続いてきた」

レオンの告白にセレナは息を呑む。

「俺も例外じゃなかった。父が亡くなった十八歳の時、体に異常が現れた。痣^{あざ}のような模様があるんだ。腰のあたりに。父が亡くなった晩、突然浮かび上がってきて」

そうやってレオンはシャツの裾をたくし上げ、背をこちらに向けた。そこには、黒く滲んだ模様。まるで何かの呪符のような、禍々しい痣が刻まれていた。